教育講演

1．急性腎障害から慢性腎臓病への移行：最近の進歩

京都大学医学研究科腎臓内科学　柳田　素子

急性腎障害（Acute kidney injury：AKI）は短期間で腎機能が急激に低下する病態であり，日常診療でもよく遭遇する．AKIには様々な原因による腎障害が含まれ，その重症度も，一過性の予後良好のものから，腎機能が進行性に低下し，生命予後も不良であるものまで，広範な病態が含まれる．AKI発症1年後の生命予後，腎予後がともに不良であることが報告されていることから，AKIを予防，あるいは早期発見し，適切に介入することの重要性が認識されている．特にAKI後の腎予後に関しては，当初漠然と想定されていたように前値まで腎機能が回復するとは限らず，障害が固定し，あるいは進行性に腎機能が低下することで慢性腎臓病（Chronic kidney disease：CKD）に陥る症例が多いことが報告され，AKI to CKD transitionとして認識されている．AKIとCKDは異なる疾患群だが，近年の臨床研究ではAKIとCKDの間に強い相互関係があることが示されている．AKIとCKDには高齢，糖尿病など共通の危険因子があるだけでなく，既存のCKDはAKIの重要な危険因子である．逆に，AKI，とりわけ重症度が高いAKIや繰り返すAKIはCKD進展や維持透析導入のリスク因子であることが報告されている．特に高齢者におけるAKIは，維持透析導入リスクを著しく増加させることが知られており，注意が必要である．我々は，AKI to CKD transitionのメカニズムとして，近位尿細管の短縮やエネルギー代謝異常，慢性炎症をきたす「三次リンパ組織」形成などを見出しており，これらを標的とした治療戦略がCKDへの移行を止め，患者の腎予後，生命予後を改善することを期待し，研究を続けている．

2．下垂体疾患最前線―下垂体炎の新たな病態―

奈良県立医科大学糖尿病内分泌内科学　高橋　　裕

下垂体炎は下垂体における炎症性疾患であり，リンパ球性下垂体炎など下垂体に限局したものから，IgG4関連下垂体炎など全身性疾患に合併する場合もある．近年，IgG4関連下垂体炎，免疫チェックポイント阻害薬（ICI）関連下垂体炎，傍腫瘍自己免疫性下垂体炎など新たな病態が明らかになってきた．

IgG4関連下垂体炎はIgG4関連疾患の一つで，比較的高齢男性に多く，多飲多尿，全身倦怠感，頭痛などを契機に診断されることが多い．IgG4関連疾患は全身の臓器に発症し得るが，IgG4関連下垂体炎は特に後腹膜線維症，ミクリッツ病，間質性肺炎，自己免疫性膵炎などに合併しやすいのが特徴である．

ICI関連下垂体炎はICIによって治療されるがん患者数の激増に伴い，日常臨床でも遭遇し得る病態である．抗CTLA-4抗体関連下垂体炎ではACTH，TSH，LH/FSH分泌不全を，抗PD-1/

各演者の略歴は135～139頁に記載